

巻頭特集

2020年東京大会から 海のレガシーを

東京2020大会を通じた 海のレガシー

—— オープン・ウォーター・スイミングを通して得られたこと ——



スポーツ庁長官
鈴木大地氏

鈴木大地：ソウル五輪金メダリスト。日本水泳連盟の常務理事・会長、順天堂大学教授などを経て、現在はスポーツ庁長官、博士（医学）

インタビュー：瀧澤

—— 鈴木長官は、水泳のソウルオリンピック金メダリストですが、今日はとくに、海との関わりを中心に伺いたいと思います。

長官は、日本水泳連盟の常務理事時代に、海、川、湖など自然水域での長距離水泳である、オープン・ウォーター・スイミング（以下、OWS）の統括責任者を務められたそうですが、OWSとの出会いをお聞かせ願います。

鈴木

OWSはマラソンスイミングとも呼ばれますが、2008年の北京五輪から正式種目に採用され、世界の水泳関係者も真剣に競技としてとらえるようになりました。近年オリ

ピックは肥大化が進んでいるので、競技や種目を減らしたほうがよいのではないかとこの流れがあるなか、OWSはあえて採用されたほどです。それほど、世界的に普及していると言えます。

OWSが五輪種目になることが決まったころ、私は母校である順天堂大学で教鞭を執っていました。オリンピックに採用されたにもかかわらず、当時はOWSに関する論文などの研究結果がほとんどありませんでした。それならば自分が研究しようと、水泳部の学生たちの運動データを心電図などで計測したり、OWSのレースに出場してもらったりしました。専門的なトレーニングを積んでいなかったにも関わらず、なんと優勝してしまいました。それが世界選

手権の予選レースでもあったので、順天堂大学の学生が日本代表として出場することになり、私も代表監督として同行しました。そのころから、OWSと関わりがありました。

しかし、海で泳ぐこと自体は、私が現役の競泳選手だったころから、トレーニングに利用できないかと考えておりました。競泳は、もちろんプールで泳ぎます。プールでの練習は、ややもすると単調なことのため、もっと面白い練習方法はないかと考えたのです。

たとえばマラソンなら、トラックを何周もする練習方法もあれば、クロスカントリーのように林の中を走ったり、ビーチを走ったり、信号機もない離島の道を走ったりと、景色が変わるのを楽しみながら練習することができます。マラソンにヒントを得て、プールだけではなく、海を泳いだりして長距離のトレーニングができるのではと考えていました。私自身は、それをきちんとトレーニング法として活用するまでには至らなかったのですが、OWSが北京五輪で正式競技になったことで、俄然興味が沸いてきて、自ら

研究に取り組むことにしたのです。

当時、日本水泳連盟のなかで、OWSの競技に出てくれないかと選手たちを勧誘したのですが、なかなか出たがる選手がいませんでした。理由を聞くと、「海の水はプールと違って汚い」、「海で泳ぐことが怖い」と選手たちは言うんです。泳能力はあるのに、「海では泳ぎたくない」と。

それならば、「海が汚い」という問題を何とかしなければならぬと思いました。できることから始めて、少しでも海の環境を良くしたい。そこで、大会の際にはビーチクリーニング活動を行うようになりました。ビーチには、空き瓶などが転がっていることもあります。水泳選手としては、そんな所をあまり歩きたくはありません。選手たちが海で泳いでくれるよう、環境改善に努めてきました。現在、それから10年ほどが経ち、お陰様で、競泳の長距離選手が海で開催される大会に積極的に出てくれるようになりました。



OWSで競う選手たち（出典：「Ocean Newsletter」第256号）

OWSの関係者としては、単に水泳の普及を考えればよいわけではありません。どうせ泳ぐなら、誰だってきれいな海で泳ぎたいものです。また、テレビ中継を考えれば、たとえば魚が行き交う海の中を選手が泳いでいたりすれば、映像としても素晴らしいじゃないですか。OWSが普及するということは、同時に、海岸のゴミ、海洋汚染など、水辺の環境問題についても考える、非常に意義のあることです。

瀧澤

——普及活動と言えば、鈴木長官は、以前タンザニアを訪問され、タンザニアの海で水泳教室をされたことがあると伺いました。

鈴木

2010年のことですね。その前に、OWSの大会でワールド・スイム・アゲインスト・マラリアという、マラリア予防のために世界中の人と一緒に泳いで寄付を募るチャリティ活動をしていました。ご存じのとおり、マラリアは蚊が媒介する伝染病ですが、1つ500円程度の蚊帳があれば防ぐことができます。水泳を通して募金を集め、マラリアに



タンザニアでの水泳教室の様子
(出典：ワールド・スイム・アゲインスト・マラリア)



苦しむ地域の人たちに蚊帳を寄付しようという取組みです。あるとき、支援会場で「本当に困っている人に届くのだろうか」と言う人の声を聞きました。そこで、自分たちが責任を持って現地へ蚊帳を運ぼうということになり、タンザニアの病院を訪問しました。

その際、せっかくだから行くのだから、現地の子どもや若い人たちに水泳を教えてほしいということになりました。そこで、いろんな方にご協力いただいて、ゴーグルやキャップを提供してもらい、現地へ行って配りました。水泳連盟としても、世界でもっと水泳が普及してほしいと思っていたので、よい機会でした。現地にはプールがなかったので、海でやることになりました。集まった子どもたちは満足な水着もなかったのですが、それでも泳ぎを習いたいという好奇心、向上心を持って大勢が集まってくれ、とても感動しました。

瀧澤

——途上国における水泳の普及活動を通じて、感じられたことはありますか。

鈴木

私は、水泳の五輪メダリストとして、世界のさまざまな国



や地域を訪れる機会がありました。そのなかには、飲み水にすら困っている国も少なくありません。そう考えると、水泳というのは贅沢なスポーツとも言えます。飲む水すらないのに、まして水泳なんてできるわけがないだろう、と。

私は、水泳で金メダルを獲得しました。世界一、泳ぎが速いと認められたわけです。しかし、果たして、本当に世界一と言えるのだろうか、と考えずにはいられませんでした。たとえば、走るのなら誰でも挑戦してみることができます。サッカーだって、丸いものがあればボール代わりに蹴って遊ぶことができます。ところが、水泳だけは衛生面が整った泳げる環境がないとできません。環境で差がつくという意味では不公平なスポーツといえます。そこで、水泳を真の世界競技にしなければと、水泳の普及活動にも携わりました。もっと世界各地の水泳環境を整えて、皆にとって平等なスポーツにしていきたいと思っています。

水泳というのは、ひとつの競技というだけではなく、人類の貧困や飢餓などの問題解決につながる可能性があるスポーツではないかと感じます。たとえば、海の近くに住んでいる場合、泳ぎができれば魚や貝を捕ったりして、食料を見つけられます。水辺の事故や災害の際には、身を守ることに役立ちます。それを水泳の世界普及について考える場合のひとつのテーマにしたいとも思っています。

瀧澤

——— 確かに、私たちの親世代までは身近な海や川で子どもたちが泳いで遊ぶのがふつうだったと聞きます。

鈴木

実は、環境に恵まれた者しか水泳ができないというのは、途上国だけの問題ではないのです。わが国においても、近年はその傾向があります。昔は「国民皆泳」と言われたほど水泳教育が盛んで、プールが普及する前の時代なら海や川で泳いでいました。その後、各学校にプールができ、水泳の授業が行われるようになりました。そのプールが老朽化し、利用しづらい現状になっているのです。加えて、ひとたび事故が起こると教師や学校の責任となるため、設備があっても水泳をやらなくなった学校もあります。

これはスポーツ庁でも問題に感じていることです。いまや、水泳は親がお金を払って子どもを水泳教室に通わせるものになっています。家庭環境や経済的な問題で水泳教室に通うことができない子どもは、泳げないままになってしまいます。これから、また国民皆泳というものを取り戻していきたいと考えています。

瀧澤

——— それは寂しい状況ですね。水泳は競技のためだけではなく、健康増進にも役立つものですから。

風を受け、疾走するセーリング競技（出典：外務省Facebook）





鈴木

水に親しむことには、多くの可能性があります。運動だけでなく、水に触れることで得られる効果も見逃せません。順天堂大学の創設者である佐藤泰然の息子で、徳川家茂や慶喜の侍医でもあった松本良順は、大磯（神奈川・大磯町）に日本で初めて海水浴場を開設しました。当時の海水浴は泳ぐというより、海水に含まれるミネラルが健康増進に役立つという健康療法、いわゆるタラソテラピー（海洋療法）でした。海水に浸かることで、人間に必要な成分を得ることができる、海水浴が健康によいと松本良順は説きました。それで、海水浴が健康増進法として流行したのです。

いまでも、海水浴による健康は重要だと思います。たとえば、地中海沿岸の地域では、地元のおじさんやおばあさんたちが暇さえあればビーチに行って、水あびや日光浴をしています。こうした習慣を、日本でも取り戻したいものです。

瀧澤

——オリンピック・パラリンピックでも、海に関係する種目がたくさんあります。セーリングやサーフィン、トライアスロン、マラソンスイミング、カヌー、ボート…。

東京だけではなく、セーリングは神奈川県の大磯、サーフingは千葉県の大磯で開催されます。日本の海でこうした競技が行われることは、世界中の人たちに日本の海の魅力を伝えるよいチャンスではないかと思っています。大変な面もありますが、世界的なイベントが行われることで、地域の海の発展にもつながっていくと、好意的に考えています。もちろん、スポーツ庁としては、海に関係するものだけでなく、すべての競技を運営として成功させる責任を負っています。

瀧澤

——子どもたちにとって、目の前で世界レベルの選手を見ることができるのは素晴らしいですね。

鈴木

そのとおりです。夢や希望を子どもたちや若い人たちに届けることができます。オリンピック・パラリンピックをわが国で開催することは、未来への投資でもあります。

また、東京五輪では、サーフingが新種目として加わりました。若者に特に人気のある競技なので、若い世代の人たちにスポーツの魅力を伝え、拡散するという面で、絶好の機会だと期待しています。

瀧澤

——パラリンピックについては、どのようにお考えですか。

鈴木

これまでオリンピックとパラリンピックは別々のものといっ



た感じがありましたが、2020年に向けて、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会を合同で立ち上げ、活動してきました。一体化したオリンピック・パラリンピック大会を世界に発信するのが、東京大会ではないかと思っています。

同時に、パラリンピックを通して共生社会の実現について考える機会にもなります。たとえば車椅子の方など、お体に不自由がある方も自然に生活できたり、スポーツを楽しんだり、あるいはスポーツ観戦をしたり。心のバリアフリーも含めて、全国に浸透してほしいと願っています。

私はリオデジャネイロのパラリンピックに視察に行きましたが、パラリンピックの施設自体は、必ずしも100%バリアフリーではありませんでした。そうした場合、周囲の健

常者がさりげなくお手伝いをするのです。パラリンピック施設だけでなく、さまざまな場面において完全なバリアフリーを整備するのは困難です。それなら、周りの人が自然に助ける考え方や環境があればよいのです。

瀧澤

——日本では、まずお金を使ってバリアフリー施設を作ろうとなりがちですね。しかし、施設建設だけではなく、人の心も大切です。

そうです。アメリカなどでは、バスでベビーカー連れのお母さんが、周りの乗客に助けられて乗り降りするのをよく見かけました。誰もが自然にさっと手助けするのです。日本では、なかなか手伝ってくれる人がいませんが…。わたしも子どもが2人いますので、ベビーカーで公共交通機関や施設を利用する困難はわかるつもりです。車椅子の方や体が不自由な方たちを周囲が当たり前のように助ける社会になるよう、パラリンピックがひとつの機会になるのでは、と祈っています。

もちろん、パラリンピック自体の競技性の高さにも注目してほしいところ。体が不自由だからレベルが低いだろうと思うのは間違いです。たとえば、パラリンピックのテニスなら、まず車椅子を操作してボールの落下地点まで行かなければなりません。それだけでもかなり大変なのに、そのうえでボールを打つのですから。通常のテニスよりも、やるのがたくさんあります。2バウンドまでOKというルールはありますが、それを考慮しても、車椅子でコートを走り回ってボールを打つなんて、非常にレベルが高いスポーツです。そうしたパラリンピックのすごさを、ぜひ見て、体感してもらいたいと思います。きっと、この人たちはすごいと感嘆するでしょう。そうしたハイレベルの競技を間近で見られるよいチャンスだと思います。

瀧澤

——2020東京大会のあと、どのようなレガシーを残すべきでしょうか。さきほど環境の問題が出ましたが、マリン





スポーツ庁で推進しているスポーツツーリズムの動画。
「しまなみ海道のサイクリング」
(出典：<https://sports.go.jp/movie/2018-2.html>)

レジャーやツーリズムの観点ではどうでしょうか。

鈴木

スポーツ庁では、現在、スポーツによる地域・経済の活性化として、スポーツツーリズムの推進に努めています。アウトドアスポーツは、そのなかの重要なテーマです。アウトドアに関しては、東京がどうやっても、地方にはかきません。海、山、川、ダムなども含めて、自然な地形はスポーツにとってパラダイスとも言える、大きな可能性を秘めています。

我々の計画として、スポーツ目的のインバウンドをもっと増やしていきたいという狙いがあります。地方に住む方がたは、自分たちが持つスポーツ資産に気付いていない例がたくさんあります。「うちの村には何も無い。海と山しかない」と、嘆かれる…。それこそが、素晴らしい宝の山なのに。それをうまく活用して、スポーツ振興につなげていただきたいところです。

たとえば、私たちがやっていたOWSの場合、サーキットシリーズというのをやっています。毎年、5月や6月ごろか

ら各地で大会を開催し、各大会に出場してポイントを貯めた選手が、最終的に日本選手権に進めるという仕組みです。これは、ひとつの例です。海がきれいで風光明媚な場所が日本にはたくさんあります。スポーツと観光が一体化することで生まれる可能性を、地域の方がたに追求してもらいたいと思います。

2019年に行われたラグビーワールドカップでも話題になりましたが、試合後に会場のゴミ拾いをすることは、日本のスポーツ文化として根付いてきています。私は個人的にも海岸でゴミ拾いをしますが、サーフィンやマラソンスイミング (OSW) などの日本の海で行われる競技を通じて、海辺の環境に少しでも貢献できる2020東京大会になれば嬉しいです。

瀧澤

本日は素晴らしいお話をありがとうございました。



インタビュー：(左) 瀧澤美奈子氏 (科学ジャーナリスト、海洋白書編集会議委員)

東京大会を持続社会の ショーウィンドウに

(株)三菱総合研究所 理事長、
東京オリンピック・パラリンピック
競技大会組織委員会
街づくり・持続可能性委員会 委員長

小宮山宏氏

小宮山宏：東京大学工学部化学工学科教授、東京大学理事・副学長、東京大学総長などを経て、現在は(株)三菱総合研究所理事長。日本海洋政策学会顧問やプラチナ構想ネットワーク会長、大学スポーツ協会顧問、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会街づくり・持続可能性委員会委員長なども務める。

インタビュワー：竹田

——今日は、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会で、街づくり・持続可能性の議論をリードされている小宮山先生に、海との関わりを交えつつ、大会について伺いたいと思います。1964年の東京大会の時は、日本はまだ発展途上国でした。先進国として開催する今回の大会は、前回と比較するとどのようになるでしょうか。

小宮山

やはり、レガシーがまったく違います。前回はオリンピックを契機として、まず首都高速ができ、東海道新幹線、名神高速道路などができました。このようなハード・インフラが一気に整備され、その後の経済成長を支えました。

「この苦しい時にこんなことにお金を使うな」という反対意見もありましたが、全体としては、日本がアジアの国として初めてオリンピックを開催できるまでになったという高揚感のほうが大きかったように思います。

現在の日本は先進国ですから、先ほど挙げたようなハード・インフラが建設されて経済発展に寄与するということはありません。現在では、持続可能性（サステナビリティ）が世界の関心事になっています。今回の東京大会では、持続社会というものを具体的に見える形で提案する機会にしたいと考えています。私は、「持続社会のショーウィンドウにする」という言い方をしています。



竹田

——小宮山先生は幼少期に東京湾に親しまれたと伺っています。しかし、高度経済成長期の東京湾の汚染は深刻でした。それから半世紀以上経ち、汚染からかなり脱却しています。この間の変化をどのように評価されますか。

小宮山

私の少年時代、東京は貧しいけれども川や海は非常にきれいでした。子どものころ、父に連れられて東京湾にハゼ釣りにも出かけました。バケツにいっぱい捕れたハゼを、母が喜んで天ぷらにして夕食のおかずにしてくれました。当時は、そうやって夕食のおかずを自分たちで調達したものです。

ところが高度成長が始まり、しかもあの当時は排水処理は考慮されていませんでした。隅田川沿いや多摩川沿いには上流のほうにさまざまな工場があり、工業廃水や生活排水を川にそのまま流していました。清流があつという間



二子玉川付近の多摩川。いまでは鮎が遡上する。

に台無しになってしまいました。多摩川もブクブクと泡がたっていたものです。隅田川も同様で、1962年から1977年までは水質汚染もあり花火大会が中止になりました。

空気もひどかったのです。太平洋ベルト地帯を中心に、光化学スモッグが頻発していました。空はどんよりといつも曇っているような状況でした。実は、空は2、3日大気汚染物質を排出しなければ改善するのです。たとえば北京がそうです。式典の前に工場を操業停止にして青空を取り戻したりしています。ところが、水はそうはいきません。泥や汚水がたまるため、短期間での改善は難しいのです。

川がきれいになるには、2、30年かかっているでしょうか。いまは、東京湾に流れこむ江戸川、隅田川、多摩川などには、鮎が遡上します。多摩川では1,000万匹もの鮎が遡上しています。ここまで回復するには、ずいぶん時間がかかりました。きれいになり始めたのは、1990年代ではないでしょうか。海はもっと時間がかかります。川の水が東京湾に流れ込んで、それが湾外に流れて、ようやくきれいになるのですから。東京湾がいよいよきれいになったのは、21世紀に入ってからはではないでしょうか。いまでは東京湾で捕れた魚がお寿司のネタになったりしています。

今回の、東京大会で見せるべきは、川や海だと思います。川や海がきれいになっていることを含めて日本の景色を見せることが重要です。渋谷という大都会から電車で10分ちょっと行けば、二子玉川駅周辺（東京・世田谷）で鮎釣りをすることができるのですから。現在、汚染に苦しめられている人たちは、世界中にたくさんいますが、その人たちに「回復できるんだ」という希望を与えたいと思いますよ。

東京大会では、「自然共生社会」をレガシーとして、社会制度や一人ひとりのマインドに残したいものです。

竹田

——ただ、一方で、トライアスロンの会場となっているお台場では水質が問題になっています。

小宮山

お台場の問題は、結局は下水処理のシステムの問題なのです。東京は割合早い段階、明治時代に、パリやロンドンなどの下水処理を真似してシステムを導入しました。そのころの人口は少なく、システムの規模も小さくて済んだので、下水と雨水を一緒にして処理する合流式でした。しかし人口が大幅に増えたいま、その合流式が課題になってきました。大量の雨が降ると雨水と下水が一緒になるため、処理しきれずに東京湾に下水が排出されます。ちょうどその出口あたりにトライアスロン会場があるため、大雨の直後は大腸菌が多く検出されるということが起きてしまいます。未処理の下水が流れ出てしまった結果です。普段は大丈夫なのですが。

いまは多くの都市で下水と雨水を分けて処理する分流式が導入されています。本来は、東京でも分流式に変えていかなければならないのですが、すでに合流式の下水が広い範囲で用いられており、その改修には膨大なコストが必要となります。可能な手段で解決できる方法を見つけなければなりません。土木や都市工学のエンジニアが、真剣に考えなければならない問題です。すでにあるシステムをどのように作り変えていくか、東京大会を契機としてイノベーションが求められています。

竹田

——水質、海洋汚染といろいろあるなかで、先生は宮古島の保良（ぼら）湾でサンゴ礁の研究をされていた経緯もあります。いま、地球温暖化の影響でサンゴの白化現象が懸念されています。

小宮山

二酸化炭素（CO₂）による温室効果については、実は19世紀に判明しています。フランスの数学者・物理学者フー



トライアスロンの会場となるお台場

リエによって仮説がたてられ、その後イギリスの物理学者チンダルが実験で温暖化を確認しています。ところが、そのころはCO₂の増加量は少なく、たいてい問題と認識されませんでした。それが1980年代、90年代になってから深刻にとらえられるようになりました。そして、いま起こっている温暖化は、学者が予測するスピードを上回っているのではないのでしょうか。

私が宮古島でサンゴの研究をしていた1990年代には、サンゴがCO₂を固定して温暖化対策の重要な切り札になるかもしれないと言われていました。私も半ばそう考えて、研究に取り組んだのです。実際のところは、サンゴは切り札にはならないことがわかったのですが、スキューバダイビングでサンゴを見ると、こんなに美しいものを壊してはいけないと本気で思いました。水温が28度を超えるとサンゴの白化が始まるので、ゲノムを操作して高温に強いサンゴを開発しようとか、水温の低いところに移植しようといった、いろいろな試みがあります。しかし、それでは間に合わないように思えます。近年、海水温の上昇に伴って、サンゴの北限がどんどん北上しています。



宮古島でのサンゴ調査（左端が小宮山氏）



海水温が上がると、サンゴの白化が進む。

竹田

——IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の報告でも、1.5度の地球温暖化で90%のサンゴが死滅するといわれています。

小宮山

そうですね。もうCO₂の排出を早くゼロにしなければなりません。『IPCC1.5度特別報告書』では、世界の平均気温上昇を1.5度未満に抑えるためには、2050年ごろにCO₂排出量実質ゼロを目指す必要性が示されています。しかし、それでは間に合わないでしょう。現在、平均気温が1度程度上昇していると言われていますが、1度の上昇でこれだけの影響が出ています。北極の氷が溶けるスピードも、我々が昔予測していたよりもはるかに速いわけです。2050年にゼロにするのは当たり前で、もっと早くに実現しなければならないというのが、いまの科学の予測です。CO₂を排出しないためには、化石燃料を使わないようにすることです。再生可能エネルギーを可能なかぎり早く導入する必要があります。同時に、省エネルギーも極めて重要となります。

そのため、東京大会でもさまざまな取組みが行われています。オリンピックの象徴である聖火台の燃料には、地球環境に配慮して水素を利用することが決まりました。大会史上初の試みです。しかし、水素の作り方が問題です。現在主流の方法は、化石燃料から水素を取り出すやり方ですが、これではCO₂も排出してしまいます。東京五輪の聖火台に用いる水素は、福島で行っている太陽光発電を利用します。そこでできた電気で、水を電気分解して水素を作ります。これは完全にCO₂フリーです。

そのほか、随所で省エネルギーを取り入れています。LEDなどは当たり前です。電気自動車、水素自動車も用いられます。これらを補うエネルギーには、再生可能エネルギーを徹底的に活用しています。

省エネルギーと再生可能エネルギーの徹底利用が大事で

すが、それでも飛行機や船で東京に多くの人がやって来るのですから、現段階では抑えることのできないCO₂もあります。その分は、植林などでオフセット（埋め合わせ）しなければなりません。省エネ、再エネ、やむを得ない部分はオフセットの3つでCO₂をゼロにする。東京大会では、だいたいこれらが実現できるというところまで来ています。

竹田

——昨年G20も大阪で開催され、海洋プラスチック問題が主要テーマとなりました。東京大会ではどうでしょうか。

小宮山

プラスチックがどうなるかというのは、現在、一番大きな問題かもしれません。無駄な包装を省くなどの対策は必要ですが、すべてのプラスチックを禁止することは無理で

しょう。現在の利便性は、誰しも捨てられないと思います。それを捨てるのではなく、前に進むのが重要です。

良識のある化学会社は真剣にプラスチック問題に取り組んでいます。しかし、最終的に釣り糸やペットボトルなど、海に流出したプラスチックをどうするのかといった問題が残ります。プラスチックを回収したとしても、消費者が使うものは必ず一部はゴミとして流出してしまいます。それならば、そのゴミが環境にダメージを与えないよう生分解性プラスチックにしていく必要があります。

海洋プラスチックの問題について、東京大会で答えを出すことはできませんが、象徴として非常に重要です。東京大会では、「みんなの表彰台プロジェクト」という、国内から集める使用済みプラスチックを使ってオリンピックの





「みんなの表彰台プロジェクト」
合同記者発表会（出典：東京
都ウェブサイト）

東京大会を持続社会の
ショーウィンドウに

表彰台を作る取り組みをしています。そのなかには、海洋プラスチックも一部活用しています。循環社会、つまりプラスチックの循環が考えられています。

竹田

——「みんなの表彰台プロジェクト」のほかに、東京大会では環境に配慮した持続可能な取り組みがあるでしょうか。

小宮山

今回の大会では、パソコンやスマートフォンから金属を集めてメダルを作る、「みんなのメダルプロジェクト」が導入されました。自然の鉱山を掘らなくても、都市鉱山から有用な資源を再生活用できるのです。

また、各地の自治体から木材を借りて選手村ビレッジプラザを建設する、木材活用リレーもあります。これには63の自治体が参加しています。大会後には選手村ビレッジプラザを解体し、木材をすべて地方自治体に返却して、木材をレガシーとして活用してもらうものです。これも循環社会です。このほか、競技場の建設には、スクラップからの鉄材がこれまでより多く使われています。

竹田

——たとえば、サーフィン会場となる千葉県の釣ヶ崎海岸では選手も参加するビーチクリーンのイベントが組織委員会で実施されています。

小宮山

スポーツ選手のような、人気のある方がたが率先して何かするのはとてもいいことです。たとえば、私は寄付をする文化は先進国では必須だと思うのですが、日本ではまだ寄付が文化として浸透するには至っていません。そうしたとき、サッカー協会が協力してスター選手が寄付をしたりしてくれました。これは非常に良い宣伝効果です。このように、一部分だけの活動にとどまらず、それを契機として大きな動きになってほしいです。

竹田

——東京大会がそうしたきっかけになれば、ということですね。

小宮山

そのとおりです。きっかけが重要です。道路や鉄道といったハード・インフラというのは、当然その後も残ります。ですが、こうしたビーチクリーンの活動も、不要になったスマートフォンなどを供出して都市鉱山として採掘することにしても、持続社会のショーウィンドウだと思います。これをやめたら、それっきりです。そうした動きをなんとかして定着させなければなりません。スマホを集めることはビジネスとしても成立するので、スマホを回収してデータ消去を行うような企業も出てきています。こうした動きが残れば、循環社会のインフラになるでしょう。1964年の前回大会はその後にハードが残りましたが、今回はそうしたソフトが残った、というふうにしなければなりません。

竹田

本日は、有意義なお話をありがとうございました。



インタビュー：(左) 竹田有里氏（環境ジャーナリスト、海洋白書編集会議委員）



図解 東京大会・海で開催される競技



トライアスロン 2000年のシドニー大会から正式競技として採用された屋外で行われる競技。一人で、スイム(水泳)1.5km、バイク(自転車)40km、ラン(長距離走)10kmを続けて順番に行う競技で順位を競う。3つの種目を行うことから、ラテン語の「3」を意味する「tri」と「競技」を意味する「athlon」を組み合わせ、「トライアスロン」という名称となった。

パラ競技は、2016年のリオ大会から採用。オリンピックの半分の距離で争う。競技者に応じて、ハンドサイクルや競技用車椅子を使用したり、同性のガイドランナー、ハンドラーのサポートを受けて競技を行う。



マラソンスイミング 2008年の北京大会から正式競技として採用された屋外で行われる競技。海や湖、川などに設置された10kmのコースを泳ぐ競技で、タイムを競う。泳ぎ方に規定はなく、どのような泳ぎ方でも可。立っても、歩いて移動しなければ失格にならない。浮力を増すウエットスーツや泳力を補う足ひれなどの着用は禁止だが、ゴーグルやノーズグリップ、耳栓などは着用できる。



ビーチバレー 1996年のアトランタ大会から正式競技として採用された屋外で行われる競技。バレーボールのコートより1mずつ狭い砂浜のコートを使用し、1チーム2名ずつで対戦、3セットマッチで行われ、1、2セットは21点先取、3セットは15点先取でそのセットの勝利となる。

静岡県



東京都港区
お台場海浜公園



東京都品川区
潮風公園



神奈川県藤沢市
江ノ島ヨットハーバー



セーリング 1896年のアテネ大会から開催されている歴史ある競技。セール(帆)に風を受けて、海上に設置されたコースを小型のセールボートで滑走する競技。速さとテクニックを競う。コースに設置されたマークを、順番どおりに決められた回数をまわり着順を点数化する。点数が低い方が高順位となる。セールボートの大きさや競技内容、乗り組む人数によって、RS:X級、470級、レーザー級、レーザーラジアル級、49er級、49erFX級、フィン級、ナクラ17級の8つの種目がある。

南房総市
館山市

東京都新宿区
国立競技場 (大会メイン会場)



東京都江東区
海の森水上競技場



千葉県長生郡一宮町
釣ヶ崎海岸サーフィンビーチ



茨城県



写真提供：(公社)日本カヌー連盟

カヌー(スプリント)

1936年のベルリン大会(女子は1948年ロンドン大会から)から開催されている競技。水上に設置された直線コースをパドルを使用してカヌーを漕ぐ競技で、複数のカヌーが同時にスタートし着順を競う。カヤックとカナディアンとの2つの種目があり、競技によって200m、500m、1000mのコースで争われる。カヤックは、シングル(1人)、ペア(2人)、フォア(4人)、カナディアンは、シングル(1人)、ペア(2人)がある。

パラ競技は、2016年のリオ大会から採用。1人乗りのシングル種目のみが行われ、競技者に応じて3つのクラスに分けられる。東京大会から、アウトリガー付きの「ヴァー」という艇で争う競技が追加される。



出典：(公社)日本ボート協会ウェブサイト

ボート

1900年のパリ大会(女子は1976年モントリオール大会)から実施されている歴史ある競技。水上に設置された2,000m直線コースを、オールを使用してボートを漕ぐ競技で、順位を競う。スカルとスイープの2つの種目があり、スカルはオールを右手と左手に1本ずつ、スイープはオールを1人1本ずつ持って漕ぐ。スカルはシングル(1人)、ダブル(2人)、クオドルプル(4人)の3種類、スイープはペア(2人)、フォア(4人)エイト(8人)の3種類がある。

パラ競技は、2008年の北京大会から採用。シングルとダブルのスカル他、舵手つきフォアがある。シングルは男女別、ダブルは男女ペア、舵手つきフォアは男女2人ずつとコックスと呼ばれる舵取り役も乗る。



サーフィン

東京大会より新しく採用される競技。サーフボードを使ってライディング(波に乗ること)し、さまざまな技の難易度や出来栄、独創性などを争う競技。サーフボードのサイズによってロングボード(長さ9フィート・約274cm以上)とショートボード(長さ6フィート・約183cm前後)の2種類の競技があるが、東京大会では、ショートボードで行われる。決められた時間内で、10本前後ライディングし、点数の高い2本の合計点で得点が決まる。